

## ある犬の回想



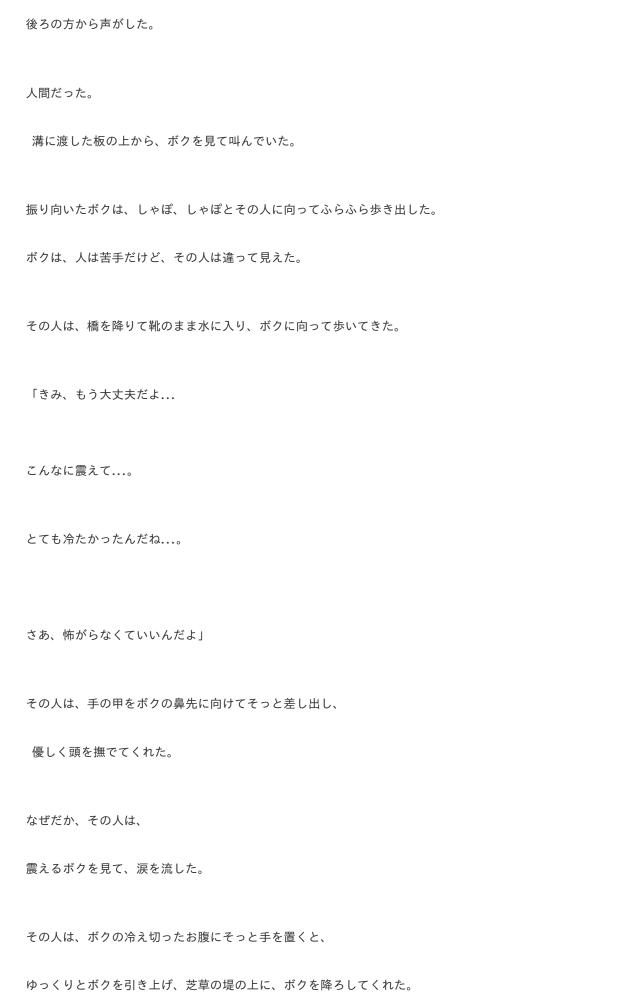


b-svaha

あるときボクは、ボクの背丈より何倍も高い、溝に落ちてしまった。 そこは、山が迫る水田地域のどこかにあった。 「しゃぽ、しゃぽ、しゃぽ、しゃぽ…」 落ちたところも、そこからいくら前に進んでも、 冷たい水がだんだん増えるばかり。 きれいだけど、ボクは水なんかほしくなかった。 飢えて食べ物を求め、水路に沿ってうろうろしていたら足元を取られたのだから...。 ボクの痩せ細ったグレーの体で、いくら前の手を堤にかけても、高すぎて後ろあしで跳ねられなかった。 惨めにやせ細ったボクの体は、色も手伝って、まるでドブネズミみたいだった。 空腹な胃袋は、ボクのきゃしゃな体を妙に重くして、背骨を小刻みに震えさせた。 進んだり戻ったりを繰り返しても、這い上がれるところは見つからなかった。 ボクは、犬の人生で最も悲嘆にくれていた。 (ここで、ボクは召されるのかな... まだ、大人にもなりきれていないのに... 素敵な女の子とだって、出会いたかったのに...)

ドブネズミのようなボクの顔をぼんやり見ていると、

きれいな水に映った、



ボクは大きく全身を振るい、冷たい水を吹き飛ばした。
すると、急にお腹が空いたので、またクンクンと地面や草の匂いをかぎ出した。
ボクは、食べ物を探すことで、もう頭が一杯になっていた。
だから、その人に、一言のお礼も言うことなく、さよならしてしまった。
親に教わった、まともなお別れの吠え方もせず、
その人の視線を濡れた背中に感じながら、歩き去ってしまった。

いや、神様は、初めから人間なのかもしれない。

あの時ボクを助けた人間は、やはり神様だったに違いない。

ボクは今、そう感じている。